

報告：日本の温帯フローラ照葉樹林と日本海要素の過去と現在（日本植物分類学会第21回大会プレシンポジウム）

1991年3月29日に上記のシンポジウムが千葉県立中央博物館で107名が参加して開かれた。日本植物分類学会は国内の植物分類学者の大半が加入する学会で会員数は約380名である。昨年から、春に行なわれる大会に合わせてプレシンポジウムが行なわれるようになり、植物分類学研究者と他分野の研究者との交流がはかられている。今回は植生史的な視点が強く打ち出されたシンポジウムであり、また前日に千葉大学で「第6回古植物コロキウム」が開かれたこともあって、植生史研究会会員の参加も目立った。このシンポジウムの趣旨は、オーガナイザー代表である大場秀章氏によれば、「日本の温帯植物相の中でも特徴的な照葉樹林と日本海要素に焦点をあて、第三紀から現在にいたる時系列の中で、それらがどのように発展・変遷をとげてきたかを、様々な解析手法による最近の研究成果を紹介することにある。また、扱う種や種群、時間、空間が多岐にわたるため、総合討論も重視する」とのことであった。プログラムは以下の通りである。

イントロダクション（大場秀章・東京大学総合研究資料館）

照葉樹林構成種の系統分類と植物地理（永益英敏・京都大学教養部）

鮮新世から中期更新世の植物地理変遷（百原 新・千葉県立中央博物館）

日本列島における最終間氷期以降の環境変化（米倉伸之・東京大学理学部）

最終間氷期以降の気候変動と日本海型植生の成立（辻 誠一郎・大阪市立大学理学部）

日本海要素と太平洋要素の分化—分子分類学的アプローチ（加藤辰己・国立科学博物館）

永益氏は、照葉樹林構成要素である日本産ハイノキ属クロキ群を、花粉、果実、葉、小枝など様々な形質を用いて分岐分類学的手法による解析を行なった。また、東アジアのハイノキ属全体を見渡した上で、日本列島の種群は中国大陸のものに、琉球列島の種群は東南アジア熱帯高地のものに類縁があるようだとの見方を述べた。

百原氏は、後期新生代以降の常緑広葉樹が優占する植物群を紹介した。また、大阪層群（大阪周辺）と魚沼層群（新潟周辺）の植物相を比較し、前者の方が消滅種が遅くまで生き残っており、暖温帯から亜熱帯に分布する植物や温帯針葉樹が多いことを指摘した。さらにこの差異が日本海側と太平洋側の差である可能性を示唆した。

米倉氏は、氷期-間氷期サイクルにおける環境変化の特性、氷期-間氷期における環境変化の地域性、日本列島とその周辺における最終氷期の古環境復原、晩氷期から後氷期（現間氷期）にかけての急激な環境変化、の4つの項目について概説した。

辻氏は、関東地方の資料に基づいて、最終間氷期以降の植物群の変遷と植生時代区分のモデルを示し、氷期-間氷期変動を通じての植生と環境の変化モデルを示した。さらに最終氷期最盛期（2万年前頃）の各地の資料に基づいた古植生図モデルを示した。詳細は正式な発表を待つべきであろうが、ブナは東北地方に、照葉樹林要素は関東地方以西の太平洋側各地に refugia を持っていたこと、西日本を広くおおった温帯性針葉樹林は、日本海側ではツガが多く太平洋側ではブナやナラを伴うこと、関東平野や瀬戸内に草原的環境が広がったことなどの指摘があった。

加藤氏は日本海側と太平洋側に分かれて分布する二つの分類群、オトギリソウ属サワオトギリ群、スミレ属スミレサイシン群について酵素レベルの分子分類学的手法（Nei's Method および UPGMA 法）による解析を加えた。結果として、サワオトギリ（日本海側）とナガサキオトギリ（太平洋側）の分岐年代は440万年前、スミレサイシン（日本海側）とナガバノスミレサイシン（太平洋側）の分岐年代は470万年前という値を示した。

加藤氏が400万年前頃の分岐という具体的な数値を示したが、植生史や地形の側からの資料では分岐の具体的な年代を示すにはいたらず、議論はかみあわなかった。しかし、取り上げる分類群によっては、相当かみ合った議論が出来る日も近いのではないかと予感された。また種分化がおこった背景としての自然環境変遷についての資料は飛躍的に増えており、一般論としての「隔離・分断」ではなく、具体的な環境変遷の資料でそれを示す時代が近づいていることを思わせた。

（南木睦彦）